

# 雪の降った日

小川未明

青空文庫



雪ゆきが降りふりそうな寒さむい空そら合あいでした。日ひも射ささなければ、風かぜも吹ふかずに、灰はい色いろの雲くもが、林はやしの上うえにじつとしていました。葉はのついていないけやきの細ほそい枝えだが煙けむって見みえるので、雲くもと木の区別くべつがちよつとわからないのでありました。

「泣なき出しだしそうな空そらね。」と、かよ子こちゃんがいきました。

「ほんとうだわ。私わたし、こんな日ひがきらいよ。」と、ふところ手でをした竹子たけこさんも、いいました。男おとこの子こたちとはなれて、二人ふたりは、並ならんで空そらをながめていました。

「もつとなにか持もつておいでよ。火ひがなくなってしまうじやないか。」

重しげちゃんの兄にいさんが、棒ぼうの先さきで、たき火びをつついていました。青あおい煙けむりが自じ分ぶんの方ほうへ流ながれるので、顔かおをしかめています。

年としちゃんは、走はしつていつて、どこからか米こめ俵たわらの空あいたのを下さげてきました。原はらに捨すててあつたとみえて、俵たわらは霜しもでぬれていました。

「待まった、待まった。そんなのを入いれると、すぐ火ひが消きえてしまう。よくここで、乾かわかしてからでないとな。」と、ブリキ屋やのおじいさんがいきました。おじいさんは、自じ分ぶんで木きくずを拾ひろつてきました。このあいだまで大工だいこくたちが、ここで他所よそへ建たてる家いえの材ざい木もくを切り

込んでいたのです。ここは、町裏の原っぱであります。

まだ、お正月なので、子供たちは、ここへきて、たこを上げたり、羽根をついたりして遊んでいました。

「ごらんよ、女があんなことをしている。乞食なんだね。」と、先に気のついた年ちゃんが、いったので、たき火にあたっているものが、みんなその方を向きました。一人の女が、長いはしのようなもので、ごみ捨て場をかき返して、落ちている菜っ葉や、新聞紙のようなもの、を地の上へひろげて、振り分けていました。

「ああ、乞食だね。」と、義ちゃん、いいました。

「いや、乞食じゃない。あちらに車が置いてある。」と、おじいさんが、いいました。なるほど、手車が置いてあつて、その車の上にかごが乗っていました。

「なんなの、おじいさん。」

「そうだな。あれは、貧乏のくず屋さんだ。」

年ちゃんは、車のそばに五つか六つの男の子が、ぼんやりと立っているのを見ました。その子供は、くつ下もはかずに、ぼろぐつをはいていました。そして、母親のところへはいこうとせずに、空に舞っていたとびを見ているようであります。

「なにをさがしているんだらうか。」

「あれは、紙かみや、金かなくずや、こわれたびんのようなものを撰えり分わけているのさ。」

「あんな菜なつ葉はも、持もつていくのかしらん。」

「きつと、家いえへ持もつていつて食たべるんだよ。」

「汚きたないなあ。」

「おじいさん、あんなごみなんかお金かねになるの。」と、年としちやんが、ききました。

「いま、鉄てつくずでも、紙かみくずでも、値ねになるのだよ。あの紙かみは、またすき直なおして、おまえたちの使つかっているような鼻はな紙がみや、もつとりっぱな紙かみになるのだし、鉄てつくずは、溶とかして、

またいい鉄てつになるのだ。」と、おじいさんは、答こたえました。

重しげちゃんは、石いしを拾ひろつて、女おんなの方ほう向むかって投なげようとしたのを、兄にいさんが、

「およしよ。そんなことをして、あぶないじゃないか。」と、いって、しかりました。

「ねえ、おじいさん、あんなくず屋やが、くつなんかをかつばらうのだらう。人ひとが見みていないとねえ。」と、重しげちゃんがいいました。

「そういうことをする悪わるいものもいるが、そんなことをしない、いい人ひともたくさんある。」と、おじいさんは、さつきのぬれた俵たわらが、もう燃もえそうになったので、お話はなしよりもそのほ

うに氣を取られていました。俵が燃えはじめると、おじいさんは脊中をあたたためたり、前の方をあぶったり、体をぐるぐるといろいろにまわして、すこしでもよく暖まろうとしていました。

「あんな菜つ葉をみんななかごの中へ入れてしまったよ。きつと、家へいつて洗って食べるのだね。」

「年ちゃんは、そんな生活をするものをさげすむようにいいました。小さな子供は、母親が、車のところへもどつてきたので、喜んで飛び上がっていました。年ちゃんは、きつと子供が、おまえはここに待っておいでといわれたので、母親のそばへいけずに長い間、車のあるところに立たされていたのだと思いました。」

「そうすると、かわいそうだな。」と、心の中で、思っていると、

「おまえたちは、みんな、まだ困った人のことは、わからないだろうからな。」と、おじいさんが、いいました。

「雪や、こんこん、あられや、こんこん、降っておくれ。」

「雪が降ってきたわ。」

かよ子ちゃんと、竹子さんが、かけ出しました。

「さあ、お家へ入ろう。」と、おじいさんが、まずたき火のそばからはなれると、重ちやんの兄さんが、つづいて去り、みんながばらばらになって、お家の方へ走り出しました。はや、原つばの上は白くなっていました。

年ちゃんは、晩に、お母さんや、お姉さんと、かるたをとっていました。

「きよがいると、おもしろいのだがなあ。」と、思いました。女中のきよは、母親が病気で田舎へ帰ったのです。

「お母さん、きよは、いつくるの？」

「母親がよくならなければわかりませんね。あの子ども、かわいそうです。いろいろな心配して。」と、お母さんは、おっしゃいました。

このあいだは、弟に、送ってやる為替を手紙といっしよに落としたのです。その後、母親が病気という知らせがきたので、きよは、驚いて田舎へたつたのでした。

しかし、こちらへきてから二年の間に、自分の力でこしらえた着物や、羽織をきて、きちんとして帰っていくときのようすは、はじめて田舎から、行李を負ってきたときの姿とは、まったく別人のようでありましたので、

「どこのお嬢さんかと思われまますよ。」と、お母さんが、からかいなされると、きよは、さ

すかに顔を赤くしましたが、それでも、うれしそうでありました。

「お母さん、おめかしをしては、いけませんねえ。」と、そのとき、年ちゃんは、いったのです。すると、お母さんは、

「いいえ、きよは、よく勤めて、お父さんにも、お金を送っていますし、なかなか感心な子ですよ。自分の力でみなりをつくることは、わるいことではありません。」

また、きよに向かつては、

「よく、おつかさんの看病をしておあげなさい。」と、おつしやいました。

夜行でたつた、きよからは、着くとすぐに手紙がまいりました。

「母の病気は、たいしたことがありませんからご安心ください。早く帰りたいと思っています。そのときは、坊ちゃんに、弟が秋のころ、山で拾ったしばぐりをもつてまいります。」と、書いてありました。

かるたの後で、お母さんは、おしるごをこしらえてくださいました。

「きよが帰るころには、もうおもちが、なくなつてしまいますね。」と、お姉さんが、いきました。

「きよに、おしるごを食べさせてやりたいな。」と、年ちゃんがいました。

これをおききなされると、お母さんは、二人の子供が、ほかの人にもやさしいのを、さもお喜びなされるように、子供らの顔を見ていらつしやいましたが、

「きよは、田舎で、おもちをたくさん食べてきますよ。」と、おつしやいました。

その翌日のことです。年ちゃんが、学校から帰つてくると、汚らしいふうをした女の人が、お母さんと話をしていました。年ちゃんは、見たことのある人のような気がしたが、思い出せませんでした。

「どうして、こんな人が、お母さんとお話をしているのだろう。」と、年ちゃんは、不思議に考えました。女の人は、お母さんの方を見て、

「私にも、今年十四になる男の子があります。学校を出ると、すぐに奉公をさせたのですが、手紙のたびに、弟はどうしているかと、いつてきます。」と、いつていました。

お母さんは、いちいちうなずきなされて、

「ほんとうに、感心ですね。それもあなたが、そうしたりつばなお心がけだからです。きつといい子におなりですよ。」と、おつしやいました。

「ただ、子供の大きくなるのを楽しみにしています。」

「そうですとも。」と、お母さんは、頭をぼ、こくりとなさった。

「おじやまいたしました。」

「女中が帰りましたら、どんなに喜ぶことでしょうか。すぐにお礼に上がらせませうか。」と、お母さんが、おつしやると、

「いいえ、お礼なんかいるもんですか。」と、女は、そうそうにして、帰つていきました。

「お母さん、いまの人だれなの？」と、年ちゃんが聞きました。

「あの人ですか、くず屋さんです。」

「なにしにきたの。」

「このあいだ、きよが、弟に送る為替のはいった手紙を落としたといつていたでしょう。

あの人をごみ捨て場にあつたのを拾つて、とどけてくださったのですよ。なんと正直なくす屋さんではありませんか。」と、お母さんは、いわれました。

「そうだったか。」と、年ちゃんは、思い当たると、ため息をつきました。いつか、原っぱのごみ捨て場で、紙くずや、菜つ葉を拾っていた女の人だ。あるとき、自分は、乞食かと思つたが、そんなに正直な感心な人であつたのかと、さげすんだことが、かえつて恥ずかしくなりました。

きよが、田舎から帰ると、お母さんは、くず屋さんがとどけてくれた手紙をお渡しにな

りました。きよは、驚いて、

「まあ、どこにごぎいましたか。」と、きよは、目をまるくしたのです。そして、土に汚れた自分の手紙をいただき、封筒を開けると、中からしわくちやになった為替券が出てまいりました。

「女のくず屋さんが、とどけてくれたのです。きつと、おまえが、紙くずや、すえぶろの灰を原っぱへ捨てるときに、いつしよにまちがつて捨てたのです。話をきくと、そのくず屋さんは、夫に死なれてから、二人の子供を育ててきたのだそうです。貧乏しても、正直で、感心じゃありませんか。」と、お母さんは、おっしゃいました。きよも、ほんとうに、そう感じたし、またありがたく思いました。

「お礼にいつていらつしやい。」

「はい、いつてまいります。」

お母さんが、くず屋さんのお家をきいておいてくださったので、きよは、お礼に行くのに、そう捜して歩かなくともよかつたのです。

きよは、電車を降りてから、小さな家のごちやごちやとたてこんだ、路次を入つてきました。すると、くず屋さんの家はじきわかつたが、表の戸が閉まっていました。

「おや、働きに出かけて、お留守なんだろうか。」と、思ったが、ふと、わきについている、小さな窓を見ると、その内で、コトツ、コトツ、コトツと、なにかおもちゃの動くような音が、きこえました。やはり、いるのかしら、と考えて、

「ごめんください。」と、きやは、いいました。しかし、返事がありません。もう一度、「ごめんください。」といいました。

すると、子供の声で、

「お母さんは、いない。」と、答えました。

きやは、お礼に持っていた、品物だけなりと置いていこうと思って、

「もし、もし、ちよつと、ここをあけてくださいな。」といいました。けれど、子供は、窓を開けるようがありませんでした。

きやは、困ってしまいました。障子の破れからのぞくと、子供は、病気とみえて、床について、ねていました。そのまくらもとには、片方の車のとれたタンクが、ころがっていました。さつき、これがびつこを引きながら、動いていたのでありましょう。

きやは、しかたなく、自分で障子を開けたのです。

「お母さんは、おかせぎにいらしたの？」と聞くと、子供は、だまって、上を向きながら、

うなずきました。

「ひとりで、おるすい？」

「僕、かぜをひいたので、ついていかなかったの。」と、子供は、答えました。

さびしい家のようすを見ると、火の気もない三畳の間に、子供は、独りでねていたのでした。きよは、かわいそうになりました。

「こんどくるときに、いいおもちやを持つてきてあげますよ。」というど、子供は、このまったく知らぬお姉さんの顔を、不思議そうにながめていました。それでも、やさしくいわれたので、なつかしく感じたのか、さびしく笑っていました。

「奥さま、ただいま。」と、きよは、お家へ帰ると、お母さんの前で頭を下げました。そして、自分の見たことを、話したのでありました。そばでこの話をきいた年ちゃんには、——いつか、雪の降った日に、くつ下をはかずに、破れたくつをはいて、車のそばに立っていた、子供の姿が、目に、ありありと浮かんだのであります。そして、寒いのに、くつ下もはかずにいたので、かぜをひいたのだらうと思われました。

「お母さん、あのくず屋さんがきたら、僕のいらぬおもちやと、絵本をやってね。」と、年ちゃんがいました。

「ええ、ねている子供こどもさんに持つもていつてもらいますよ。そんなに不自由ふじゆうをしていても、まちがったことをしない、ほんとうに感心かんしんな人ひとですものね。」と、お母かあさんは、しみじみとおっしゃいました。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

初出：「お話の木」

1938（昭和13）年2月

※表題は底本では、「雪《ゆき》の降《ふ》った日《ひ》」となっています。

※初出時の表題は「雪の降った日」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年11月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 雪の降った日

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>